

お盆の行事

お盆の由来

お盆は、くわしくは、盂蘭盆会といひます。古いインドの言葉に「さかさにつるされるような苦しみ」という意味の「ウランバナ」という言葉があります。盂蘭盆会とは、そのような苦しみを救うための供養と云うことです。お釈迦さまの十大弟子の一人である目連尊者が、お釈迦さまの教えに従って供養することによって、亡くなった母親の苦しみを救ったことに由来しています。この盂蘭盆会が、インドから中国を経て日本に伝わってきたのは今から千三百年以上も前の推古天皇の頃だといわれています。こうしてお盆は毎年夏に行われる国民的行事です。

お盆には、地方によって、宗派によってさまざま習慣やしきたりがあります。お盆は、もともとは旧暦の七月に行われたのですが、新暦が採用されてからは、八月に行うようになりました。十三日から十六日まで行うところが多いようです。一般的には次の様に行われます。

まず、盆前に墓掃除を行います。そして、十二日から十三日の昼頃までに精霊棚(盆棚)をかざります。盆棚はご先祖さまのみ魂をお迎えするところで、四隅に青竹を立てた台の上に真菰をしいて、先祖の位牌を中心に、供物、灯火、盆花、線香、お水などを供えます。地方によっては、また、最近では、盆棚を作らずに、仏壇の前に飾るところもあります。十三日の夕方には、お墓の入口や門口で迎え火をたき、先祖を家まで案内します。盆の終わりの十六日には、精霊送りが行われます。先祖が乗って帰るようにと、ナスやキュウリの牛、馬を川に流したり、灯籠流しや精霊船など、にぎやかに行く地方もあります。そして、夕方に送り火を門口でたいてお盆は終わります。

新盆のおたくへ

■亡くなった方を、初めて迎えるお盆のことを「新盆」とか「初盆」といって、特にいねいに供養を営みます。

■「盆供養」とは、先祖の霊を、年一回あの世からお迎えして供養することですから、七七日忌(四十九日)を過ぎてから初めて迎えるお盆が、ほんとうの意味での「新盆」となります。つまり、亡くなった日が六月末などで、七七日忌(四十九日)を終えていない新盆の場合は、翌年を待って初盆とするのが普通です。

■新盆には、決まったお供え物のほかに、故人の好物などができるだけたくさん供えます。

ハスの花

都市化が進む我が国では、ハスが生える沼も少なくなりました。日本料理に用いられるレンコン(蓮根)も、今では外国からたくさん輸入されているといひます。ですから、実際にハスが生えている情景を知っている人も、だんだん少なくなりました。■『花果同時』というように、ハスは花が咲いたときには、花の中に既に実が稔っている、といひます。また、ハスは泥沼から生えて栄養を摂取しながら、泥に染まらぬ清らかな花を開きます。

■新盆のちようちは、白一色のものを用います。連綿と続いてきたわが生命の由来を思い起すにふさわしい日本の祭り・お盆。さあ、家族そろってご先祖を供養しましょう。

お盆の準備



空海の言葉 シリーズ

道を学んで、利を謀らず

「性霊集」

●●●学問は世の中の役に立つ人間になるためにするのであって、金儲けのためにするのではない。

人間がどんなに財産を積んでも、位がどんなに上がっても、どんな名誉に輝いても、どんな権力を手にいれても、死んでしまえば何も残らないではないか。こんなことのために学問をするのなら、わたくしは辞めだ。

独学でもいい、世の中のすべての人びとの幸せのために、大宇宙の法則である「道理」とやらを研究するぞ！

と、弘法さんは、決心したので。そして、ひたすら「人間の心」について深く探求することになるのです。

